

後山山荘の再生物語

谷藤史彦

2017. 06

Vol. 4

Ⅲ 藤井家の物語

昭和初期の売立

大阪美術倶楽部において、1933年（昭和8年）10月29日に「広島県藤井此君園氏所蔵品入札」という売立が行われた。筆頭札元は大阪の坂田作治郎で、宰領は藤井厚二であった。この入札名は、造酒業も営む藤井家が販売していた銘柄名「此君」からとったものである。この売立も、藤井与一右衛門が厚二に依頼して行わせたものであった。ここに与一右衛門の趣味性ばかりか、厚二の趣味性も見えるのである。

この売立には、300件の作品が出されていたので、その概要を少し詳しく見てみたい。

まず大きな部分を占めるのが、絵画112件である。その多くは江戸期のものであるが、藤井厚二は著書『日本の住宅』のかなでそれらの画家について詳細に次のように述べている。

田能村竹田は描くに清人の画を模し、之に務めたので清人江稼圃は其の模倣することの巧なるを賞した程ですが、画を描くに南画の手法に據り俳句に漢語を多く用いても、自己の真髓は没却しなかつた与謝蕪村に対する如き敬慕の念は起こりません。従って竹田の作品は蕪村の如く偉大でもなければ、浦上玉堂の遺した作品程の感興も起しません。我国の三名陶工の一人と云わるゝ青木木米の作品に於ても自己を忘れた模写が極めて多く、尾形乾山

の如き面白味はなく頗る不満を感じ、反って余技であった画に於て共鳴す可き点が多いように思われます。建築に於ても偉大なる建築物は極めて気持ちよく崇高の念にうたれ、之より受くる印象は実に深いものです。斯かることは蕪村の如き非凡の名手に対しては望み得ることですが、偏屈なる個性の発露は模倣以上に不快です。曾我蕭白は圓山応挙の画風を罵倒しましたが、偏狭なる個性はその作品に表れて応挙以上に不快なる感を与えます。（6）

ここに述べられた画家たちの作品も売立に含まれていた。たとえば、田能村竹田の《淡彩秋景訪友山水》（図12）や青木木米《松下煎茶 竹田賛》（図13）、そして浦上玉堂《米法山水大幅》（図14）といった縦長の軸装の山水図があった。竹田、木米の作品は、垂直方向の線が目立ち、静かな落ち着きをもっている。藤井厚二が特に評価していた浦上玉堂の作品は、北宋後期の描法に倣った山岳山水で、筆は粗放であるが生動感がみなぎる図であった。さらに、尾形乾山の《朝妻画讚》（図15）、円山応挙の《瀑布亀》（図16）、与謝蕪村の作品も含まれた《諸名家書画張交六枚折屏風一双》もあった。

註

（6）藤井厚二『日本の住宅』岩波書店、1928年、137-138頁。



（図12）田能村竹田《淡彩秋景訪友山水》



（図13）青木木米《松下煎茶 竹田賛》



(図14) 浦上玉堂《米法山水大幅》



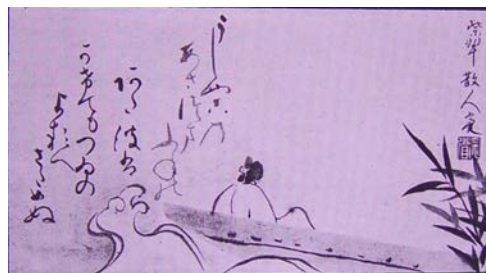
(図16) 円山応挙《瀑布亀》



(図17) 岸駒《牡丹孔雀 皆川書 双幅》

その他、伝岩佐又兵衛の《浮世絵中屏風 一双》、岸駒《牡丹孔雀 皆川書 双幅》(図17) (7)、谷文晁《富士山水横物》、田能村直入《梅谿訪友詩画》、呉春《海辺老松鶴》、松村景文《蓬莱双幅》、伊藤若冲《御柳仏桑花横物》、酒井抱一《籠蛤画讃》、岡田為恭《源氏絵》、頼山陽《水墨山水画賛》、中島来章《中菱花双鯉 左春景嵐山 右秋景通天 三幅対》、富岡鉄斎《青緑蓬莱山》、狩野尚信《中布袋 左蓮鷺 右芦雁 三幅対》、狩野周信《大舜 左右夏冬真山水三幅対》、松尾芭蕉《竹画讃》、今尾景年《秋池水禽》、幸野樸嶺《夏谿書屋》、竹内栖鳳《薫風行吟》(第2回帝展出品作)などがある。江戸初期から続く藤井家の歴史を反映して、美術館に収まるような江戸から明治にいたる代表的な画家たちの作品がそろっていて壮観である。

書は12件あり、主なものには、沢庵《一行》、松平不昧《山田月画讃》、了々斎(表千家九世)《横物》、吸江斎(表千家十世)《富士画讃横物》、碌々斎(表千家十一世)《大横物》などがある。藤井家は代々表千家流の茶の湯の系統のようで、茶掛の書が多いのも特徴である。表千家の記録によれば、久田家の門下に藤井家の系譜が現れる。三代久田宗全の時に入門し、四代久田宗也の時に皆伝を受けた藤井不源斎(善右衛門、1759年没)、久田宗参の弟子、藤井景二(不入斎、1856年没)、久田耕甫の弟子で、碌々斎の在世中の幕末に家元が全焼した時(1864年)、多大な寄進をした藤



(図15) 尾形乾山《朝妻画讃》

井景甫(不朽斎、1889年没)の名前が見られる(8)。これらの茶掛の書からも、表千家の系譜を守っていた形跡が見えるのである。

その茶の湯の趣味を物語るように、茶道具(懐石の器を含む)は140件もある。内訳は、茶碗22口、香合18口、茶入・棗10口、茶杓8本、花入7口、水指9口、釜5口、向付11口、鉢や盆26口、香炉1口、その他23件となっている。

茶碗で、世間の注目を浴びた《御所丸茶碗》については、後で詳しく述べるが、それ以外の茶碗でも《青井戸茶碗 呼銘みどり》、《利休所持 長次郎 赤茶碗 呼銘常盤》、《志野茶碗》、《釘彫伊羅保茶碗》、《錐呉器四方茶碗》、《斗々屋平茶碗》、《黄瀬戸筒茶碗》、《古伊羅保内刷毛目茶碗》、《光悦 黒茶碗》といった名碗の数々を持っていたようだ。

香合では《呉州松皮菱香合》、《古染付張子牛香合》、《祥瑞本手立瓜香合》、《唐物独楽平香合》、《祥瑞瑠璃雀香合》などある。棗では《利休判黒棗》、《宗全一閑張菊棗》など、茶杓では《宗全共筒茶杓》、《利休茶杓》など、花入では《権十郎一重切花入》など、水指では《万曆赤絵榭水指》、《青磁鉄鉢大水指》、《祥瑞一閑人山水花鳥丸紋絵共蓋水指》など、釜では《古天明方衝釜》など、鉢では《祥瑞本捻鉢見込牡丹》、《古備前半月形手鉢》、《呉州赤絵福字鉢》などがある。

その他では、《長船忠光脇差 金牡丹獅子拵》など28口の刀剣があった。

(7) この作品は、売立後に藤井家に残り、2007年度になってふくやま美術館に寄贈されたもの。

(8) 末宗廣編『茶人系譜(新編)』河原書房、1985年。

以上に見られるように、藤井与一右衛門のコレクションは、江戸から明治にかけての日本画や茶の湯関連が主体となっていて、数寄者としての趣味性を示すものであった。

御所丸茶碗

先にも触れたように、この売立で最も注目されたのは、《御所丸茶碗》(図18)であった。出品番号は「1」、名称は《本手御所丸茶碗 藤屋伝来》となっていて、通称《御所丸茶碗 藤井》とされていた。

御所丸茶碗というのは、古田織部の好み(意匠)によって現在の韓国の釜山近郊、金海の窯で焼かせたもので、御所丸という古くからの対鮮貿易の御用船で運ばれた茶碗であると考えられている。文禄・慶長の役(1592-1598)の際に島津義弘がこの手の茶碗を朝鮮で焼かせ、それを御所丸船で運び豊臣秀吉に献上したという伝承がある。ただ、最近の研究によれば島津義弘の軍は文禄・慶長の役では金海を経由していないことから、御所丸船で秀吉に献じたという説は疑問視されているが、御所丸という名称が御用船の名称からつけられたのは明らかなことであった(9)。御所丸茶碗には、よく焼

き締まった白色の肌の本手、あるいは白刷毛目と呼ばれるものと、その上に黒い鉄砂を片身替わりに塗った黒刷毛目と呼ばれるものがある。形はいずれも歪みがあり、高台が篋で五角ないし六角に切られている。本手御所丸茶碗の代表的なものとしては、《古田高麗》(鴻池家旧蔵)や《藤田》(藤田美術館蔵)があり、そしてこの「藤井」がある。この茶碗は大阪の日本料理店「吉兆」の店主湯木貞一に所蔵され、やがて湯木美術館に移って、「由貴」という追銘がつけられている。この茶碗は、やや丈の高い杳形で口縁は玉縁、胴には細かい轆轤目が巡り、強く張った腰には粗い篋削りが施されている。大きな高台は九角になり、高台内は無釉で無造作に篋で削られる(図19)。白い釉薬は柔らかく、胴には淡紅色の斑紋、腰には薄墨色の丸い滲みあり変化のある景色になっている。あたかも春の淡雪のような風情があることから、松永耳庵により追銘がつけられている(10)。

- (9) 赤沼多佳「注文の高麗茶碗」『高麗茶碗御本とその周辺』茶道資料館、1992年、96頁。
(10) 末廣幸代「茶碗名品選」『茶道雑誌』1997年9月号、28頁。



(図18) 《御所丸茶碗》



(図19) 《御所丸茶碗》高台

この御所丸茶碗の売立の筆頭札元となった坂田作治郎（柏樹老）とは、大阪・高麗町の道具屋で、湯木と永年親しくしていた人物だった。「90年の道具屋生涯ちゅう、柏樹老のいちばん華々しかったのは、何ととっても、広島県福山の藤井此君園の売立の時でした（11）」という。坂田は、昭和初期に銀行破綻を発端とする事情で困っていた女性の世話をしたことがあった。その陰徳に感激したのが、その女性、快（平池家）の兄であった藤井厚二という。その縁で、藤井は兄与一右衛門から売立を頼まれた時、旧知の坂田に一任したというエピソードがある。

「なにしろ福山の藤井家といえ、尾道の橋本と併称される中国筋の道具持と知られ、その宝庫を一手に掌握したので、すから、道具屋冥利、男一疋の花の舞台が提供されたようなものです。人間陰徳を積めば必ず陽報あるを柏樹老しみじみ体得したわけです（12）」。実際、「庫を開くと、ウブ品たくさんで、なかには乾山絵替りの筒向十客など、いまだ一度も使ったこともない真新しいのが出ました。とりわけ、一と際光りかがやいたのは白手御所丸の茶碗でした。それまで関西では伝説の多い鴻池の古田高麗をもって白手御所丸の第一品といわれていたが、それに劣らぬ名品だった（13）」というのである。

坂田は、大阪のほとんどの老舗を札元に加わえたが、肌の合わなかったためか春海商店を札元に加えなかった。これを知った春海商店の三尾邦三は大いに憤慨し、藤井厚二に捻りこんだという。三尾の様子に驚いた藤井は、坂田と相談して札元に春海商店を加えることとなった。こうして三尾としては意地でも御所丸を取らなければならなくなった。前入札で二番札だった京都の土橋嘉兵衛もその後、倉敷の大原三楽庵（孫三郎）の命を受けて入札に臨むこととなった。

そして入札当日、特別扱いとされた御所丸茶碗は青竹の柵に囲まれ、三尾と土橋は伝説的な競り合いをしたのである。その結果、通り相場の7、8万円をはるかに越え、三尾が15万円で落札し、土橋が13万5千円で二番札となった。土橋はそのかわり、乾山作絵替筒向付を2万6千9百円で落札した。

三尾は、落札したものの引取る先もなく困り果てていた。最後は友人だった南海鉄道の寺田甚吉に泣きつき寺田家に収まった。終戦後は、芦屋の松岡家に移り、茶事に用いられた。その後、湯木貞一のもとに入ったという。「御所丸が私の手もとに届いた時、同町に住むよしみでわが子が戻ったように喜んでくれたのは柏樹老人でした（14）」と湯木は述懐している。そして坂田は湯木に「この頃は黒刷毛御所丸が流行るそうですが、黒刷毛なんぞは狂言の黒塗婿のように一段低いもので、白手御所丸の気品の高さは能の老女物の風格があります（15）」と言い遺したという。それが昭和30年代前半のことで、湯木はこの御所丸を早速に茶事で使ったが、1963年（昭和38年）には追銘がつけられた。先述のように追銘をつけたのは湯木と昭和20年代から親交のあった松永耳庵で、御所丸茶碗のなかでも白い釉が際立つ逸品であることと湯木の名をかけて「由貴」とされた。

もともとの内箱蓋表には筆者不祥で「御所丸 茶碗」と銀粉字形されている。現在の内箱蓋表には「御所丸 由貴」とされ、蓋裏には「八十八翁 耳庵」と松永耳庵の手で書かれている。以

(11) 湯木吉兆庵「茶極道」『茶道雑誌』1960年3月号、72-73頁。

(12) 同書、73頁。

(13) 同書、73頁。

(14) 湯木吉兆庵前掲書、74頁。

(15) 同書、74頁。

後、湯木貞一はこの御所丸茶碗を愛用し、大切な茶事の折には「大井戸茶碗 銘対馬」、「釘彫伊羅保茶碗 銘秋の山」などとともに入れてきたというのである。

藤井家

このような名品を所蔵していた藤井家というのはどのような歴史をもっていたのだろうか。

藤井家は、もともと徳川家康の曾祖父、松平信忠の弟・利長から始まると伝えられている。利長は、三河、矢作川の河畔、現在の愛知県安城市藤井の地に藤井城を築き、藤井松平家を興した。その子廣長は、藤井を姓とし戦国時代に毛利の配下に入って、備後に移り、藤井家の初代、源蔵右衛門廣長となり、現在の福山市の東部、春日池に近い、浦上の城を預かった。しかし、毛利と豊臣が和睦すると、廢城の命がくだされ、城を取り壊した。その後、深津村（現在の福山市東深津町、西深津町）に移り郷土となった。徳川家康が天下を取り、徳川家康の従兄弟、水野勝成が1619年に「西国の鎮衛」として福山に入封すると、藤井家は御用商人として登用され深津町（現在の福山市宝町）に移った、と藤井家では伝えられている。

江戸期から明治、大正期にかけての藤井家については、『福山市史』にもたびたび登場しているので、これらをもとに詳しく見ていきたい。

福山城下の元禄期（1688–1704年）において商業が発展し畳表や綿の取引なども盛んになっていたが、塩鉄問屋を独占していた深津町の商人として3人の名前があげられていて、鍵屋甚左衛門の他に、鉄屋与一郎、そして鉄屋九郎右衛門がいた（16）。「鉄屋」とは、古くから使われている藤井家の屋号で、鉄屋与一郎は当時の藤井家本家の当主、鉄屋九郎

右衛門は分家の当主であると考えられる。福山藩主から鉄および塩の専売を許されていたわけである。

江戸時代前期に、潮の干満を利用して海水を塩田に取り込む入浜式塩田の方法が瀬戸内海地方を中心に開発され、文化文政期から天保期（1804–1844年）にかけて、塩田開発がピークを迎える。福山藩でも松永や浦崎、百島浜、藤江などの地区で開発が進んでいき、幕末から明治初期にかけても柳津地区で開発が進められている。明治2年（1869）に柳津村慶応浜、13町余の開発で4人の商人が塩田を買い受た記録があるが、そのひとりが藤井与一右衛門であった。藤井家は、松永地区に13軒（1軒は1町5反から2町）という広い塩田を所持していた（17）。

藤井家は、先述のように水野家藩主時代（1619–1698年）以来の御用商人で、鉄商を営んでいたが、阿部家藩主時代（1710–1871年）になると酒造・製塩に加えて繰綿問屋・貫目改所をも営むようになる（18）。つまり、水野家藩主時代に鉄の専売を許されて、阿部正邦の封入（1710年）以後に塩の製造販売、および酒造および販売、綿問屋の営業が許されて事業を拡大させているのである。

それでは、藤井家は福山藩の御用商人の中でどのくらいの位置付けにいたのであろうか。阿部家藩主時代の初期の「御用聞町人」は城下町で26名いた。そのなかに、鉄屋与市郎（塩鉄運上）、鉄屋三右衛門（塩鉄運上）、鉄屋五郎右衛門（実綿運上）という名が登場する（19）。鉄屋を背負っていたのは、一家で

（16）『福山市史』中巻、国書刊行会、1983年、107頁。

（17）同書中巻、614–617頁。

（18）同書中巻、693頁。

（19）同書中巻、693頁。

はなく分家を合わせた三家であったことがわかる。あるいは、幕末に近い時期においても次のような記述がある。天保8年（1837年）の御用商人の席順の記録があり、12人のうち上位5人を見ると、1) 延藤吉兵衛、2) 信岡平六、3) 神野利右衛門、4) 鉄屋与一右衛門、5) 鉄屋三右衛門となっている(20)。また、同年、江戸城西ノ丸焼失に際して、福山藩は2万両を幕府に差し出しているが、そのうち御用商人からの調達金は8千2百両で、延藤吉兵衛、川本屋吉兵衛、神野利右衛門が各々千5百両、続いて鉄屋与一右衛門、鉄屋三右衛門など6家も各々5百両を差し出している(21)。また、天保14年（1843年）当時の福山藩領内の扶持人（家来）として扶持米を貰っていた商人の位を見ると、二十人扶持が延藤吉兵衛で、九人扶持が信岡平六、八人扶持が藤井与一右衛門など6人、五人扶持が鉄屋五郎右衛門など15人であった(22)。

以上のように江戸期における藤井家は、福山藩のなかで重要な位置づけの御用商人であったことがわかる。

この傾向は明治維新後も没落することなく続き、その存在感をますます強くしていった。

明治12年（1879年）の沼隈郡今津村と同8年の深津郡川口村の記録を例にとると、他村居住者で二町以上の所有者がそれぞれ5～6名存在していて、とくに両村に各2町余を所有していたのが深津町の藤井与一右衛門であった。それが後年に百町歩地主としてこの地方最大の地主に成長していったというのである(23)。また別の資料では、幕末の慶応年間に藤井与一右衛門は90町を擁していたとの記録がある(24)。さらに、地租改正後（1884年）の松永地区の塩田の所有者の記録には、全体で58浜、19人の所有者がいて、その筆頭で13浜を所収していたのが藤井与一右衛門となっている(25)。

5)。

明治期半ばから明治期末にかけてもその傾向は続く。明治30～40年代における深安郡主要地主の記録があり、それによると百町歩以上の地主が3名いて、その筆頭が旧藩主の子息、伯爵の阿部正直（晩翠舎）で163.5町、次が藤井与一右衛門で134.4町、そして河相家が創設した済民組織「義倉」で129町だったという(26)。阿部家は東京に在住していたので、地元福山在住の筆頭の大地主は藤井家ということであった。

また明治期の藤井家は、商人というよりも近代の経済人として活躍していた。例えば、明治19年（1885年）時点で、尾道の銀行で現在の広島銀行となっていく第六十六国立銀行についてみると、全株主中の第5位で、福山関係者の筆頭の120株の株主が藤井与一右衛門（11代）であった(27)。あるいは藤井与一右衛門は、明治29年（1898年）、資本金30万円で福山の船町に創設された福山銀行の取締役会長に就任した。持株数は550株の筆頭で、河相三郎が420株で専務取締役、斜森保兵衛が300株で同じく専務取締役であった(28)。また同じく明治29年、資本金5万円で開業した福山貯蓄銀行の取締役に、藤井与一右衛門が就任し、持ち株数は全2000株中の180株で、筆頭であった(29)。福山銀行と福山貯蓄銀行は、現在の中国銀行（岡山）につながる。つまり、中国地方を代表する2つ銀行の創設に関わるひとりとして名を連ねたのである。

(20) 『福山市史』中巻、717頁。

(21) 同書中巻、947頁。

(22) 同書中巻、717頁。

(23) 同書下巻、253頁。

(24) 同書下巻、253頁。

(25) 同書下巻、342頁。

(26) 同書下巻、268頁。

(27) 同書下巻、409頁。

(28) 同書下巻、417頁。

(29) 同書下巻、420頁。

新しい産業も次々に興していく。藤井与一右衛門は、明治26年（1893年）に福山紡績を設立し、頭取に就任した。ここは福山随一の近代的な工場であったという（30）。あるいは、明治42年（1909年）当時の『福山商工人名録』に載る営業税と推測される納税額200円以上の商人が12（法人および個人）あり、その最高額の812円50銭に紡績糸・木綿業の坂本政七、5位の323円87銭に酒造業の藤井与一右衛門が記載されている（31）。また、大正11年（1922年）、港町の福山電気株式会社が資本金50万円で設立され、藤井与一右衛門（12代）が社長に就任した。第二次大戦中の統合合併推進のなかでも独立を保持していた稀な会社であった（32）。このように藤井家は、明治期から大正期にかけて、江戸期以来の鉄や塩の取り扱い、酒造業に加え、銀行業や繊維産業、電気事業へと業務を拡大させていったわけである。

また福山市の誕生の時にも大きな力をもっていた。大正5年（1916年）7月1日に市制が施行されると、53の個人・法人が発起人となり、7月18日市役所において福山商業会議所（現在の福山商工会議所）発起人総会が開催された。創立委員には、河相三郎、斜森保兵衛など8人に加え、藤井与一右衛門も選ばれている（33）。

さてこのような名家であった藤井家であるが、先述の売立がどのような目的で行われたのか気になる所である。この売上によってダムを作ったとか、鉄道を敷いたというエピソードもあったが、関係者からの聞き取りを総合すると次のようなことであった。藤井与一右衛門は、近代的工場（福山紡績と思われる）を操業するために、電力の確保が必要となり、そして趣味としていた山歩きついでに山野（現在の福山市山野町）の地形に注目して、水力発電ダムを作ったのである。ダムの操業のために福山電気株式会社を

先述のように設立し、水力発電を始め、その電力を中国電力にも売りはじめた。中国電力とは定量を提供する契約をしたため、渇水時にはディーゼルエンジンで発電しなければならず、その運転資金が必要となっていたわけである。売立では、筆頭の御所丸茶碗が15万円、総額で85万余円という売り上げがあり、これは当時の福山市の年間予算に匹敵するものだった（34）。したがってその売上金は、ディーゼル油を賄うことや設備の更新など事業運営に回されたと考えられるのである。

(30) 『福山市史』下巻、386頁。

(31) 同書下巻、399頁。

(32) 同書下巻、737頁。

(33) 同書下巻、720頁。

(34) ちなみに昭和8年（1933）の福山市の歳入79万7613円、歳出73万9205円であった。